

【所感】

長崎市議会議員 林 広文

福州市友好都市提携35周年記念訪問団に参加して

【第1日目】

上海経由で福州長楽国際空港に着く。かなり規模の大きい空港に驚く。月曜日の夜にしては多くの人々が行き交っている。福州市自来水有限公司の職員の皆さんのお迎えがあり、専用のマイクロバスにて市内へ。福州市での3日間は視察、移動は常に有
限公司の方のお世話をいただく。本当にありがたかった。

市内へ向かうバスからは開発中の大型マンション、ビル群が続く風景。マスコミ紙上では景気の減速や不動産バブルなどの風評が語られているが、旺盛な国土開発意欲が感じられる。

福州市外事僑務弁室主催の夕食会では日本語の堪能な張副主任のもてなしにより、和やかな雰囲気
で歓談する。福州市側の我々に対する歓待振りには一貫して並々ならぬ意欲を感じる。



【第2日目】

終日、福州市自来水有限公司及び福建海峡環保有限公司による施設見学、意見交換を行う。

まず、西区浄水場を視察。市内6つの浄水場の中で最大の規模である。処理能力は60万 m^3 とのこと。処理方式としては本市との差異はないが、規模が大きく、職員数も多い。原水から浄化していく各処理過程を見せていただいたが、日本の都市に備わるレベルは十分クリアしている。コンピュータシステムも最新鋭のものを整備しており、効率的に集中管理が行われていると感じた。各セクション入口には指紋認証システムが導入されており、セキュリティについては日本以上に厳重に行っている。また、元来、湖を中心に水量が豊かであるため、
濁水の心配はないとのこと。



現地視察後、有限公司本社ビルにて意見交換。パワーポイントによる説明の後、活発に質疑が飛び交う。水道料金は長崎よりやや割安のようだ。高層ビルが圧倒的に多いが、給水タンクを備えており、ビルでの給水は日本と同じシステムとのこと。企業経営については、水道事業そのものは国の施策方針に沿って行っているが、収入と支出のバランスは均衡がとれており、健全な財政状況がうかがえる。会社の最高責任者となる毛総経理は39歳と若い代表であるが、健全な経営に手腕を発揮していると感じた。

午後からは市郊外に位置する洋里下水処理場へ。ここも処理能力は60万 m^3 。長崎市の下水処理場は最大規模でも5万 m^3 であることを考えると、とにかくスケールが全く違う。処理設備についても最新鋭のものが採用されており、もちろんコンピュータシステムにより集中制御されていた。最新式の制御室も見せていただいたが、肥大化する都市機能を支えている施設である。下水道普及率も87.5%に達しており、都市によっては日本より高いのではないかと（長崎市は93.2%）。経営は水道とは別会社の福建海峡環保有限公司が行っている。比較的新しくできた会社であり、経営幹部、技術者とも若い方が多く感じた。

意見交換では、むしろ会社側からの質問が多かった。特に、下水処理において発生する汚泥の処分について意見が集中した。長崎市で行っている汚泥のコンポスト化や焼却灰の再利用について、その手法やコストを確認していた。中国では現在、環境問題の克服が国家的課題として掲げられており、いかに環境に負荷をかけずに都市としての機能を高めていくのかに腐心している状況がうかがえた。（福州市内では電動バイクで移動する市民がものすごい数だった。日本のようなガソリン駆動の原付バイクはほぼ皆無。大気汚染対策が徹底されているように感じた。）



【第3日目】

福州市の交易関係の施設を視察。

福州市福清市に建設されている福州港江陰港区を見学。福州保税港区の一角としてコンテナ処理能力は年間10万トンに達する。とにかく規模が大きい。以前、韓国釜山の港湾施設の大きさに驚いたことがあったが、今後、福州港は世界有数の貿易港になる可能性を秘めている。（ちなみに世界一は上海港。釜山は世界第5位。）直近のニュースで中台首脳の電撃的会談が報じられたが、台湾に地理的に最も有利な港が福州

港であり、今後、中国の交易において重要な役割を果たすものと思われる。

午後から福州自由貿易試験区受付ホールを視察。福州市では自由貿易協定（FTA）に基づく無関税取引の試験区として同地域を指定している。新設間もないため、今後取引がどの程度伸びていくのか不明だが、前述の台湾との交易の展開によっては世界有数の自由貿易地域（FTZ）になる可能性があると感じた。



その他、日本黄檗宗の開祖である隠元大師出身となる福清市の「黄檗山万福寺」、明・清時代からの下町である「三坊七巷」を見学した。

【第4日目】

空路、上海市へ移動。午後から長崎県上海事務所を訪問。同事務所は平成3年に長崎県初の海外事務所として中国・上海市の上海国際貿易センター内に開設されており、中国における経済・文化・市民交流の拠点として機能している。県へのインバウンド対策はもとより、特に中国へのビジネス展開への足掛かりとして欠かせない拠点であると感じた。

事務所駐在員の久保氏（十八銀行出向）によれば、景気減速の観測が多い中国であるが、国内での消費購買意欲はなお旺盛で、11月11日の「独身の日」セールを行ったネットショッピング大手アリババグループの売上額は1日で1.7兆円とのこと。若年層、中間層をターゲットとするこの商圈にどのように本県企業が割り込んでいけるか、智慧を絞り、その戦略を明確にして取り組む必要があると感じた。中国国内にビジネス拠点を展開することでさらなる交流関係の深化が図られるのではないか。上海・高島屋での保税區での取り組みなどを参考に今後早急に事業化を図るべきである。



続いて、長崎魚市アンテナショップを視察。現地法人代表より「長崎鮮魚」の中国

市場での販売状況の説明を受ける。2015年の販売見込みは、輸出数量210トン、金額で7億5千万円であり、過去最高の販売となることは間違いないとのこと。取引店舗数は26都市、600店余りとなっており、さらなる拡大を見込んでいる。傾向としては、訪日客の増加により、目、舌の肥えた人が増えており、本物の日本料理を食べたいというマーケットは確実に拡大している模様。安全、安心のブランドとしての価値を高め、安定的に出荷量を確保できるかが課題となっている。また、今後、現在週3回の定期便の増便、高い関税率（26%）、嵩む運搬費、手数料などの障壁をいかにクリアしていくか、県・市・企業との連携した戦略が必要と感じた。

その他、上海市内の「南京路」「バンド地区」などを視察した。

【総括】

今回、福州市友好都市提携35周年記念訪問団として、初めて中国を視察した。

当初、マスコミ等で喧伝されている大気汚染が気になっていたが、現地では全く気にならなかった。福州市、上海市ともに大都市であり、人の数、車の数も想像を絶する膨大なものであったが、GDP世界第2位の大国として、力強く前進しているエネルギーを感じた。中国共産党としての一党独裁とは言われるが、接した行政府幹部、公司職員は皆、親切で思慮深く、真のエリートとして国を支えていくという自負心に溢れた人物が多かった。

現在、13億8千万人、2020年には14億5千万人に達するといわれる人口を抱える中国は、今後もアジアのみならず世界の大国として良くも悪くも話題の中心となることは間違いない。日本と中国の関係は近年、必ずしも良好とはいえない状況が続いてきたが、お互いに引っ越しはできない地理的關係を考えると、困難な懸案はあったとしても互いの目を見て、胸襟を開いて話し合うことこそが肝要である。そのうえで考えると、本市、本県が福建省、福州市、上海市等と続けてきた友好交流は、絶対に継続すべき大事な事業である。

今後とも、この交流が実りあるものとして継続できるように、普段から中国理解のための研鑽や、冷静な国際情勢の分析等、議員としての資質を高めるためにも、率先して取り組んでいく決意である。